

目的 最近では異常な子殺し事件が次々に報道され、若い母親の子に対する養育態度が問題にされている。私たちは、小中高の家庭科における人生指導や家庭教育の重要性を痛感する。そこで今回は、現代の日本社会において、母性喪失がどのように現れているかを見、その要因を探求するためにこの調査を行った。

方法 ①最近10年間に於ける朝日新聞縮刷版掲載の乳幼児関係事件の分類集計。
②犯罪白書及び離婚統計・生活関連統計等の分析参照。
③乳幼児事件に対する幼稚園・保育園児の母親の意見調査。

結果 本調査10ヶ年の乳幼児事件数を順位別にみると、1位、交通事故、2位、心中、3位、殺人・全未遂、4位、災難となっているが、昭和44年から昭和48年までの後半5ヶ年では、1位、殺人・全未遂、2位、心中となり、母子心中や子殺しが増えていく。然も心中母の年齢をみると、20代が事件数の49%、30代前半が29%を占め、大部分が若い年齢の母親である。又その原因の中に、生活苦やノイローゼも上っているが、家庭不和が最も多い。殺人・全未遂事件については、20代の年齢層が49%を占めている上に、更に未成年が3%もある。この事件では、産みずて、片親、家庭不和などが背景として大きく取上げられる。これらから、母性喪失事件については、家族関係の原質についての考察の必要を大いに認めなければならぬことが一層明確になった。尚、母親の意見調査においては、地域差は殆んどみられなかったが、項目によつては、家事専業の母と就業の母の間に差異があつた。